

「ぶどう酒に変わった水」井上隆晶牧師
列王記下2章19～22節、ヨハネ2章1～12節

①【神の時を静かに待つ】

カナで婚礼があり、イエス様と弟子たちは宴会に招かれました。当時の結婚披露宴は七日間行われました。その婚宴の最中にぶどう酒がなくなってしまいました。母マリアはイエス様に「ぶどう酒がなくなりました」と相談します。マリアがぶどう酒の心配をしているのはこの婚宴がマリアの親戚の婚宴であり、彼女は接待役だったからです。それに対してイエス様は「婦人よ、わたしとどんな関わりがあるのですか。わたしの時はまだ来ていません」(4節)と言われます。「婦人よ」というのは冷たい言い方のように聞こえますが、当時の言い方で「お母様」というような意味です。「私とどんな関わりがあるのですか」は「あなたはどうぞお考えであれ、私には私の考えがあります」という意味です。「わたしの時はまだ来ていません」とはどういう意味でしょう。「時」という言葉は聖書の中で何度も出てきます。有名なものは「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」(コヘレト3:1)という言葉です。ゲッセマネでイエス様は「もうこれでいい。時が来た」(マルコ14:41)といわれました。それは十字架で死ぬ時のことをいっているのですが、神がその栄光の姿や力を現される時だと理解していただければよいと思います。私たちはすぐに必要が満たされることを願いますが、神には神の定めた時というものがあって、私たちはその時を待たなければなりません。

●心なごむ会では今、引きこもりについて学んでいます。前回は「待つ」ということを学びました。人間には自己回復力があり、それは各個人によって違うのだから、それを信じて待つことが大事だということです。だが人間はなかなか待てません。ヘンリ・ナウエンは待つためには①既に何かが始まっていると信じること。②自分の願望を手放し、希望を持つこと。③自分の将来を操作しようとせず、信頼すること。の三つを挙げています。待つことは非常に宗教的なことです。私は未来を信じられない人に「人から出たものは信じられなくても、神が造ったもの、神がなさったことは信じなさい。」と言っています。祈らない人は目先の状況に惑わされるので、信じられなくなります。目がいつも地を見ており、神を見ていないのです。神の目で人や物事を見ることが必要です。

母マリアは神の時を待つことができる人でした。彼女は召し使いたちを呼んで「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」(5節)と言い、ぶどう酒を買いに行かせることもせず、宴会の世話役に相談することもせず、この問題をイエス様にお委ねして待ちました。

②【人間の労働と神の働きで万物は完成する】

宴会場にはユダヤ人が清めに用いる石の水甕が六つありました。一つの水甕は 80ℓ～120ℓが入るものでした。イエス様は召し使いたちに「水がめに水をいっぱい入れなさい。」というので、彼らは甕の縁まで水を満たしました。一つの水甕に 2 リットル入りのペットボトルだと、40本～60本です。それが 6 つですから 240本～360本になります。水道からではなく井戸から汲むのですから何度も往復をしなければなりません。大変な重労働です。なぜイエス様は召し使いたちにこんな行動を命じられたのでしょうか。

●デミトリイ神父は「世界はたんに神からの贈り物ではなく、人に課せられた仕事である。」と述べています。

私たち人間は、神の性質の一つである創造する力を受け継ぎました。私たちが聖餐式の時に献げるのは小麦ではなく、それに人間が手を加えたパンです。ぶどうを献げるのではなく、人間の手と労働が加わったぶどう酒を献げます。人間を含めたすべての被造物は、人間の労働によって完成されるということです。六つの水甕は、六日間で造られた世界を象徴しています。つまり人間が世界に手を加え、作り替えることで、この世を完成させるようにされたのです。それは人間も同じなのです。人間は神の像（かたち）を持つ者として創造されましたが、それは最初から完全であったという意味ではなく、完全に向かって成長するようにプログラムされていました。神（キリスト）の似姿にまで成長してはじめて完成されるのです。だからエデンの園には最初から労働が与えられていたのです。「神は人を連れてきて、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。」（創世記 2：15）私たちは死ぬまで自分自身に対して手を加えなければならないのです。そのために人生の労働と修道生活があるのです。神が創られた水に、人間の労働が加わって、更にそれが神の働きによって最上の物に変容するのです。特に信仰生活においては、同じ時間に、同じ動作、同じ祈りを繰り返すことは非常に効果があります。

●19 世紀にクロンシュタットのイオアン神父という人がいました。彼は 10 歳で学校に入りますが、字がほとんど読めませんでした。しかし彼は神に祈って、字が読めるようになり、難しいことも理解する力もいただき、首席で卒業します。彼は多くの奇跡を行ったことで有名になりますが、彼の力の源は、「聖餐と時課の祈り」でした。彼は祈りについてこう語ります。「司祭には、主の祈りをはじめ、祈りの反復が責務です。なぜなら、魂の強化は多様性に富む祈りよりも、同じ祈りを反復することによってそれを私たちの心、意志、あらゆる生活のうちに定着させることができるからです。」

祈り続けること、伝道し続けること、説教し、語り続けることは、水を汲むようなことです。週報を送っても読まずに、捨てられるかもしれません。説教をしても何にも入らず、空を打つような思いをすることもあります。時に、無駄ではな

いかと思うこともありますけれども、続けることが大事なのです。

●奈良に薬師寺という有名なお寺があります。第二室戸台風の時に、お寺は大打撃を受けました。講堂の棟が折れ、豊臣時代にできた金堂は千枚の瓦が飛び、鎌倉時代にできた東院堂の瓦は五百枚飛びました。しかしもっとも古い天平時代に造られた三重塔はびくともしませんでした。なぜでしょうか。塔の屋根裏部屋に入ると、そこには身動きが取れないほどの多くの材木を使っていたからでした。今の建築なら、三つの塔が立つくらいの料だそうです。このように見えないところに時間をかけたからこそ、台風が来てもびくともしなかったのです。薬師寺の高田好胤さんは「最小の効果をあげるためにも、最大の努力を惜しまないことを三重塔から教えられた」といっています。

私たちがこの水を汲んだ僕に倣いたいと思います。

③【良いものは後から与えられる】

イエス様は「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」(2:8)と言うと、召し使いたちは水を世話役の所に運んで行きました。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をしました。聖書には、水がいつ、どのようにしてぶどう酒に変わったのかは書かれていません。書かれていないことは考えなくて良いということです。大切なことは人間の知らない所で、知らない内に神様は素晴らしい業をして下さるといことなのです。世話役は花婿を呼んで言いました。「誰でも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわった所に劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」(10節)酔っぱらうと何を飲んでも感覚が麻痺しているので一緒です。だから最初に良いぶどう酒を出し、酔っぱらってから劣ったものを出すのが普通なのに「あなたは良いものを後取って置かれた、あなたは素晴らしい」と世話役は言ったわけです。これは世話役の口を借りた預言です。「良いぶどう酒を今まで取って置かれました」という言葉はキリストの福音を表しているのです。

多くの人はこの世を誤解しています。良い物は先に与えられて、少しずつそれは減っていき、人生の終わりにはすべてを失うと思ひ込んでいますが、全くの逆です。最後に一番良い物が与えられるのです。神であるキリストは、良いものを天に取って置かれ、人間の労働が終わった後に提供されます。この良い物とは「永遠の命、キリストの似姿、朽ちない天の宝」と呼ばれるものです。これは聖書が一貫して語っていることです。

先日、ある人が「実を結ぶってどういうこと?歳をとってわがままになったらキリストのような実を結べないじゃあないですか」と聞いてきました。私はそれを聞いて確かにそうだなあ、と思いました。しかし今は労働の時であって、報いの時ではないのです。永遠の命という賃金は、この世の労働が終わってから支払われます。この世の内にキリストに似た実を結べなくても、来世で結ぶのだと思います。この世では出来る限り、キリストに似ようと努力をすればよいのだと思います。この体

に手を加え続け、来世ですばらしい実を受け継ぐのを楽しみにしてこの世を過ご
しましょう。